1　次の□内にあてはまる語句として最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 花紅柳□　　解答番号は［1］。

② 清廉潔□　　解答番号は［2］。

③ □天霹靂（へきれき）　　解答番号は［3］。

④ 一獲千□　　解答番号は［4］。

⑤ 日常□飯　　解答番号は［5］。

ア 青　イ 白　ウ 金　エ 茶　オ 緑

2　次の作品の作者を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

①　雪国　　解答番号は［　6　］。

②　みだれ髪　　解答番号は［　7　］。

③　潮騒（しおさい）　　解答番号は［　8　］。

④　古事記伝　　解答番号は［　9　］。

⑤　夜明け前　　解答番号は［　10　］。

ア　本居宣長　　イ　三島由紀夫　　ウ　川端康成　　エ　島崎藤村　　オ　与謝野晶子

3　次の文法に関する問いにそれぞれ答えなさい。

問一　次の文を、品詞に分解したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

①　回転のスピードが速まる。

解答番号は［　11　］。

ア　名詞・助詞・名詞・助詞・動詞

イ　名詞・助詞・動詞・助詞・動詞・助動詞

ウ　名詞・助詞・名詞・助詞・形容詞

エ　名詞・助詞・動詞・助動詞・動詞

②　何を書けばよいかわからない。

解答番号は［　12　］。

ア　名詞・助詞・動詞・助詞・形容詞・助詞・動詞・形容詞

イ　名詞・助詞・動詞・助詞・形容動詞・助動詞・動詞・助動詞

ウ　名詞・助詞・動詞・助詞・形容詞・助詞・形容詞

エ　名詞・助詞・動詞・助詞・形容詞・助詞・動詞・助動詞

問二　次の文の傍線部と同じ意味・用法で使われている文として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

①　雨の降る日が続く。

解答番号は［　13　］。

ア　近いのですぐに戻ってこられる。

イ　彼女のペンが見つかった。

ウ　彼の書いた詩を読んだ。

エ　妹は読むのが好きだ。

②　六人のメンバーで構成されている。

解答番号は［　14　］。

ア　泳いで走ってやってきた。

イ　鉛筆で答えを書く。

ウ　彼の鉛筆である。

エ　まるで夢のようで、なんだか怖い。

問三　次の文の傍線部の品詞名として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は　15　。

バケツいっぱいにたまる。

ア　副詞　イ　形容詞　ウ　連体詞　エ　動詞

4　次の文章を読んで後の問いにそれぞれ答えなさい。なお、設問の都合により表記を一部変えたところがあります。

その夏は、病院通いの夏だった。おじいちゃんが心臓をわるくして、入院したのだ。白い病室の、白いベッドの中のおじいちゃんは、家にいたときよりずっと小さくみえた。

お母さんと私は、こうたいで毎日、病院に行った。(a)スイジャクしているから夏はこせないだろう、とお母さんは言ったけれど、おじいちゃんはちっともぼけていなかったし、いつもにこにこと元気そうで、とても死ぬ人にはみえなかった。それに、私は十一月に結婚することがきまっていたので、少くともそれまでは元気でいてほしかった。

とても暑い水曜日のことだった。おじいちゃんは調子がよさそうで、いつもより少しだけ①饒舌(じょうぜつ)だった。

「麻子はべっぴんになったなぁ」

「うふふ、そうお？」

「透くんのせいかな」

透くん、というのは私の婚約者の名前である。

「わしといっしょになる前のさよも、そんなふうじゃったよ。ほっぺたなんぞ桃色にそめてな」

おじいちゃんは、おばあちゃんのことをけして、ばあさん、と呼ばない。さよ、と呼ぶ。おばあちゃんは私の生まれる前日に亡くなったので、まだおばあちゃんにはなっていなかった、というのがおじいちゃんの理屈だった。

「年をとるのはわし一人じゃ」

おじいちゃんは時々、そう言って②さみしそうに笑った。

「かき氷が食いたいなぁ」

子供じみた口調で、とうとつにおじいちゃんが言った。

「ああ、かき氷が食いたい。氷いちごがいいなぁ」

きこえよがしに言うおじいちゃんの声に、③私は思わず笑ってしまった。そうして近所の喫茶店に無理をいって、氷を二つ、とどけても

らった。

まっかなシロップのかかった氷いちごを、おじいちゃんは夢中ですくい、うれしそうに口に入れた。黙ったまま五さじくらい食べた。私は、目の前の氷に手をつけるのもわすれて、おじいちゃんの食べっぷりにしばらくみとれていた。私の視線に気づいたおじいちゃんが、

「はやく食べんか。とけてしまうぞ」

と言ったので、私はその、（b）ムサイ色の氷すいをしゃくりと一さじ口に入れた。さぁっと冷気がひろがる。

「（注1）氷すいはつまらんのぅ」

おじいちゃんが言った。

「色もなくて、味もそっけない」

でも、そのそっけない氷すいが、私は昔から好きなのだ。④さくさくとすくうと、さくさくと透明な冬の兵隊が行進するような、つめたい音がする。

「さよも氷すいが好きじゃった」

おじいちゃんは、赤く染まった舌をのぞかせながら言った。

子供のころから、私はよく、おばあちゃんの生まれかわりだといわれてきた。おばあちゃんが、私の生まれる前日に亡くなったためだけではなく、好みや顔かたちも、私はおばあちゃんに似ているらしいのだ。それに時々、私はふしぎな記憶を感じることがある。ずっと昔の、私がまだ生まれてもいないころのことを、なぜだかおぼえているような気がするのだ。昔、母の口紅をいたずらしてしかられ、

「ママだって昔、おんなじことをしたじゃない」

と言ったのは、⑤ただの口ごたえではなかった。ほんの一瞬ではあったけれど、こっそり口紅をいじっている幼い母の姿を、思いだしたのである。

いつだったか、おじいちゃんが、大きな鮎（あゆ）を一日に五十ぴきもつったことがある、と言ったときもそうだった。誰も信じなくて、お父さんなど、

「五十ぴきとはまた大きくでましたね」

と言って笑いとばしてしまったけれど、私はなんだかおぼえているような気がした。鮎は塩焼きがいちばんおいしいけれど、食べきれないので（注2）あめだきにして、半月ほどもかかって食べたような、⑥そんな気がした。

「私、おぼえてる」

と言っても、みんなはきょとんとしていたけれど。

それでも、⑦私は自分がおばあちゃんの生まれかわりだなどと、思ったことはない。二十五年間、私は自分で感じて、自分で考えて生きてきたのだし、私が私以外の誰かであることなど、とても想像できない。第一、もし私がおばあちゃんなら、お裁縫やお料理が、もっとうまくてもよさそうなものではないか。それに、いくらおばあちゃんだといっても、みたことのない人の生まれかわりだなどと考えるのは、少し気味がわるい。

そんなことを思いながら、私が氷すいを半分ほど食べるあいだに、おじいちゃんは氷いちごをぜんぶぺろりと食べおわり、すました顔で新聞を読んでいた。

八月の最初の日曜日、⑧透くんもいっしょに病院に行った。おじいちゃんと透くんとは、前に何度か会ったことがあるのだけど、おじいちゃんはまるで初対面みたいに透くんをまじまじと見て、

「ほぉ、これがそうか。ええ男じゃな」

と言った。そのくせ透くんが、

「柴田透です」

と言って頭を下げると、

「知っとる、知っとる。そんなことはとーっくに知っとるわ」

⑨おじいちゃんは、ぶぜんとしてそう言った。

そのあと、おじいちゃんと透くんは、テレビの高校野球に子供のように熱中した。病室の窓からは庭が見え、ねまきのまま散歩している

（c）カンジャさんが見えた。大きなけやきが風にゆれていて、私たちはみんなで、テレビをみながら桃を食べた。

夕方、私たちが帰ろうとすると、おじいちゃんはにわかにすねはじめ、足がいたい、腰がいたい、と言いだした。仕方なく私はもう少しのこることにして、透くんを玄関までおくり、エレベーターで病室にもどると、おじいちゃんはもう、けろっとしていた。

「帰ったのか」

「ええ」

私が少しあきれて、

「おじいちゃん、足は？腰は？」

と、おこった顔をつくって言うと、おじいちゃんはこまったように首をすくめ、うふふ、と笑った。そうして、

「ちっと、嫉妬（しっと）したんじゃ」

などと言うので、今度は私の方がはずかしくなってしまった。

「もう一つ、桃をむいてくれんか」

おじいちゃんが言い、私はすべらかに白い、みずみずしい桃をむいた。窓から、とても気持ちのいい風が入った。

「ほんとに、透くんを愛しとるのか」

おじいちゃんがきいた。

「いやぁね、あたりまえでしょ」

「ほんとにか」

「おじいちゃんっ」

さすがにはずかしくなってさえぎると、おじいちゃんはにっこり笑い、

「⑩ええぞぉ、夫婦は」

と、無邪気なほどあかるく言った。

その時に二人で食べた桃が、おじいちゃんの食べた最後の、ちゃんとした食べ物だった。あくる日から容態が悪化して、点滴と流動食でしか、栄養をとれなくなってしまったのだ。おじいちゃんはベッドの中で、日に日に小さく、弱々しくなり、それでも私が行くといつもにっこり笑った。

九月になると、おじいちゃんは少し快方にむかったように見えた。その日も、［　A　］のなくような小さな声で、しかしはっきりと、

「ああ、いちじくが食いたいなぁ」

と言った。

「うれた、やわらかいいちじくが食いたい」

（注３）食い道楽のおじいちゃんがあのあじけない流動食だけで生きていることがふしぎだった私は、おじいちゃんがひさしぶりに見せた食欲がうれしくて、すぐにくだもの屋に買いに行った。

病院のそばのくだもの屋というのは心得たもので、

「お見舞いですか。暑いのに、たいへんですね」

などと（注４）お愛想（あいそ）を言い、

「いちじくはいいですよ。栄養価が高いから元気がつきます」

とつけくわえた。でもいちじくで元気をつけるひまもなく、私がもどるとおじいちゃんは亡くなっていた。ほんとうに、あっけない死に方だった。

私はいわゆるおじいちゃん子ではなかったけれど、おじいちゃんの死を目のあたりにして、ぼうぜんとしてしまった。ショックだった。病院の（ｄ）コウシュウ電話で家に電話をし、透くんの会社にも電話をし、それから病室にもどって、おじいちゃんの死に顔をみた。

⑪からっぽの顔だった。私はそのままぼーっとしていた。涙はでなかった。

「さよ。さよ」

私のうしろで声がして、おどろいてふりむくと、おじいちゃんが立っていた。
「さよ、もうでておいで」
私は息がとまりそうに（ｅ）キンチョウした。病室じゅうに、うす紫の花がさきこぼれている。
「はやくでておいで、そのまま透くんと結婚するつもりか」
⑫おじいちゃんは、私が今まで見たこともないほどやさしい目をしていた。
「ほほほ。いやですよ。あなたのそばにいたくて、いたくて、ここにいたんじゃないですか」
私はぎょっとした。私がしゃべったのだ。でも私じゃない。私の口からでた、私の声だったけど、でも、私じゃない。
「わかっとるよ。だからこの二十数年、わしは浮気ひとつできなんだ」
「ほほほ。浮気のひとつくらい、大目にみてさしあげましたのに」
私は、私の意志とは関係なくいすから立ちあがり、おじいちゃんのそばにいった。意識は目覚めているのに、ちっとも思いどおりに動けない。
おじいちゃんは私の腕をとり、病室をでようとして思いだしたようにふりかえった。私もつられてふりかえると、たった今私が立ち上がったいすに、もう一人、私がちゃんとこしかけていた。おじいちゃんももう一人いて、ちゃんとベッドに横たわっている。うす紫の花は、なんだか（注５）妖艶（ようえん）にさきほこっていた。
「ええぞぉ、夫婦は」
すわっている方の私にむかっておじいちゃんが言い、その横で私もにっこりとうなずき、私たちは腕をくんだまま、ドアをあけて病室をでた。ドアが閉まった瞬間、私は病室の中の、いすにすわった方の、私になっていた。うす紫の花が、さらさらと散った。
お母さんが来て、お父さんも来て、ほかにも親戚が何人か来た。夕方になると、透くんも来てくれた。私は透くんの顔をみたとたんにあんしんして、涙がはたはたおちた。透くんは、そっと背中に腕をまわしてくれた。でも、あの時私は、おじいちゃんが亡くなって泣いていたのではなく、透くんに会えてうれしくて泣いていたのだということを、透くんは夢にも知らずにいたと思う。

⑬十一月になったら、私たちは結婚する。

（川上弘美『つめたいよるに』から「スイート・ラバーズ」より）

（注１）　氷すい…削り氷に砂糖水をかけたもの。
（注２）　あめだき…小魚やクルミの実などをみりん・水あめ・しょうゆなどで甘くつやよく煮あげること。
（注３）　食い道楽…うまいものや珍しいものを食べるのを趣味とすること。
（注４）　お愛想…相手の機嫌をとるための言葉。
（注５）　妖艶…あやしいほどになまめかしいこと。

問一　傍線部①「饒舌」の意味として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［16］。

ア　口数が非常に多いこと。
イ　流ちょうに話すこと。
ウ　早口で話すこと。
エ　はっきりと話すこと。

問二　傍線部②「さみしそうに笑った。」とあるが、ここでの「おじいちゃん」の心情として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［17］。

ア　「おばあちゃん」との若い頃の思い出を共有する相手がいないことをとてもやりきれなく感じている。
イ　「おばあちゃん」が「おじいちゃん」よりも先に亡くなったことで孤独に感じている。
ウ　「おばあちゃん」のほっぺたが桃色に染まったことを思い出し懐かしく感じている。
エ　「おばあちゃん」のもとに旅立っていかなくてはならないことを悲しく感じている。

問三　傍線部③「私は思わず笑ってしまった。」とあるがそれはなぜか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は［　18　］。

ア　昔「おじいちゃん」が同じことを言って、子どものようにかき氷を頬張っていたのを思い出し懐かしい気持ちがしたから。

イ　かき氷を入手するのは難しいが、「おじいちゃん」を落胆させないために笑ってごまかそうと思ったから。

ウ　わざわざ聞こえるように言って、望みを叶えてもらおうとする「おじいちゃん」の姿に、茶目っ気を感じたから。

エ　病床でも食欲を抑えられずに、自分の好きなものをねだる「おじいちゃん」の大食漢ぶりに、あきれてしまったから。

問四　傍線部④「さくさくとすくうと、さくさくと透明な冬の兵隊が行進するような、つめたい音がする」とあるが、この表現について説明した文として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　19　］。

ア　氷すいの冷たさや質感を、擬声語や比喩表現を用いて表し、氷すいを楽しむ「私」の様子を表現している。

イ　氷すいの味の奥深さを、擬声語や比喩表現を用いて写実的に表し、読者に氷すいのおいしさをうったえかけている。

ウ　氷すいの味と色を擬人法を用いて抽象的に表現し、これから起こる不思議な出来事が夢の中で起こったことであると予感させている。

エ　氷すいの質感や色を、擬態語や比喩表現を用いて具体的に表し、氷すいと「私」の姿を読者が自由に想像できるようにしている。

問五　傍線部⑤「ただのくちごたえではなかった」とあるがこの時の「私」の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。

解答番号は［　20　］。

ア　母がいたずらしている姿を知っていたのに、同じことをしてしかられてしまったことを後悔する気持ち。

イ　以前母も同じことをしていたと祖父に聞いていたため、知っているんだぞと勝ち誇った気持ち。

ウ　母も同じことをしたはずなのに、しかってきたことに驚く気持ち。

エ　母がいたずらをする姿を思い出し、自分だけ怒られている状況に抗議する気持ち。

問六　傍線部⑥「そんな気がした」と表現しているのはなぜか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　21　］。

ア　自分が経験していないはずの出来事に関して記憶があるような不思議な感覚であり、確かな記憶と断言しきれないから。
イ　祖父から聞いた話をもとに、ふと想像しただけで、実際に起こったかどうかはわからないから。
ウ　自分が鮎釣りを経験した記憶はあるが、忘れてしまった部分が多く、断言することが難しいから。
エ　祖父が大げさに話したため、周囲の人に嘘（うそ）を付いていると思われないよう、それらしい話を付け加えようと思ったから。

問七　傍線部⑦「私は自分がおばあちゃんの生まれかわりだなどと、思ったことはない」とあるが、それはなぜか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　22　］。

ア　自分自身の意思によって行動してきたという認識があり、会ったこともない人の生まれ変わりなどと考えられなかったから。
イ　似ているからという理由で生まれ変わりだと考えるのは単純で、短絡（たんらく）的な考え方だと思っているから。
ウ　親族であれば外見や性格が似ているのは自然なことであり、生まれ変わりとまでいうのは大げさだと思っているから。
エ　祖母は料理や裁縫の名人であり、それらを苦手とする自分とは共通する点が見つからず、似ている点もないから。

問八　傍線部⑧「透くん」とあるが、本文全体を読んで、どのような人物だと考えられるか。次から適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。解答番号は［　23　］。

ア　無邪気な人物
イ　誠実な人物

ウ　気配りのできる人物
エ　無口な人物

問九　傍線部⑨「おじいちゃんは、ぶぜんとしてそう言った」とあるが、ここでの「おじいちゃん」の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　24　］。

ア　「おじいちゃん」は自身の命が長くないことを自覚しており、「私」が頼りない「透くん」と結婚することは若い二人の問題なので立ち入るべきではないと考えているが、内心では反対していることをそれとなく知らせる気持ち。
イ　「私」に「おばあちゃん」を重ねている「おじいちゃん」にとって「透くん」は恋敵であり、そんな「透くん」と「私」が結婚することを歯がゆく思っており、その気持ちが「透くん」に対してのささいな意地悪に表れたことを苛立(いら)っている。
ウ　「透くん」が「私」にふさわしい人物であると確認でき、「私」の将来に対して安心する気持ちが生まれているが、そんな二人の将来を長く見届けられないだろうことを寂しく思っている。
エ　「私」と「透くん」との結婚に関しては反対しており、そのような気持ちを理解しようとしない「私」に対しての苛立ちの気持ちが、「透くん」へ向かってしまったことを子どもじみたことをしたと落胆している。

問十　傍線部⑩「ええぞぉ、夫婦は」とあるがこの時の「おじいちゃん」の気持ちとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　25　］。

ア　自分の結婚生活は短く後悔が残っているため、少しでも早く結婚をし、夫婦でいられる期間を長くしてほしい気持ち。
イ　結婚に対して大きな不安を抱える孫である「私」が、少しでも明るくなるようにと励ます気持ち。
ウ　自分の充実した結婚生活を思い出し、孫である「私」にも早くこの思いを体験してほしいと強くすすめる気持ち。

エ　自分の娘が結婚し、孫である「私」が産まれたときの喜びを思い出し、早くひ孫にも会いたいと思う気持ち。

問十一　空欄Ａに当てはまるものとして最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　２６　］。

ア　蜂（はち）　イ　蝿（はえ）　ウ　蚤（のみ）　エ　蚊（か）

問十二　傍線部⑪「からっぽの顔」とはどのような様子か。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　２７　］。

ア　「おじいちゃん」のこの世に対する未練がなくなった様子。

イ　「おじいちゃん」の顔からあらゆる感情が抜け落ちた様子。

ウ　「おじいちゃん」の死によって「私」が呆然（ぼうぜん）としている様子。

エ　「おじいちゃん」の魂が体から抜け出てしまった様子。

問十三　傍線部⑫「おじいちゃんは、私が今まで見たこともないほどやさしい目をしていた。」とあるがそれはなぜか。最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　２８　］。

ア　「おじいちゃん」は「私」を通して「おばあちゃん」を見ており、再び会えたこととこれからずっと一緒にいられる喜びから「おばあちゃん」への愛おしさが強まったから。

イ　「おじいちゃん」は自身の死を悟り、その死を受け入れることが、来世での「おばあちゃん」と自身の幸せにつながると考えていたから。

ウ　「おじいちゃん」は入院してからも途切れることなく見舞いに来る「私」に感謝しており、最後にその感謝の気持ちを余すことなく伝えたかったから。

エ　「おじいちゃん」は「私」が「透くん」と幸せな結婚生活を送ることができると確信しており、二人の姿にかつての自分たちの姿を重ねたから。

問十四　傍線部⑬「十一月になったら、私たちは結婚する。」とあるが、これについて説明した文として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　29　］。

ア　「私」が祖父の死を受け入れたことを表現し、生前の祖父とした、結婚をして幸せになるという約束をはたそうとしていることを強調している。

イ　祖父の死をきっかけにそれぞれの関係に変化が起こり、祖父と祖母、「私」と「透くん」が互いに新たに歩んでいくことを暗示している。

ウ　季節が夏から秋に変わり、これから冬を迎えることを表現し、死という悲しい出来事が起こっても時間は着実に進んでいくことを強調している。

エ　結婚の意志が変わらないことを確認し、自分たちの結婚生活が、祖父母の結婚生活のように幸せで充実したものになることを暗示している。

問十五　右の文章の表現の特徴として最も適するものを次から選び、記号で答えなさい。解答番号は［　30　］。

ア　ひらがな表記を多用することで、柔らかさ、優しさを感じる表現となっている。

イ　一文が短く切られているため、読者が想像する余白を残す表現となっている。

ウ　語り手を第三者に設定することで、読者は「私」に導かれて小説の世界に没入しやすくなっている。

エ　「おじいちゃん」の死が時系列に沿って書かれているため、読者は非現実な世界を受け入れやすくなっている。

問十六　傍線部（ａ）～（ｅ）に相当する漢字を含むものを次の各群のア～エのうちから、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

（例を参考にすること）

例　カンゼンな形で残す。
ア　シンゼンで結婚式を挙げる。
イ　ゼンイの寄付。
ウ　グウゼン休みの日に会った。
エ　アンゼンな場所。
答え　エ

（ａ）スイジャク

ア　栄枯セイスイ。
イ　毎日ジスイをしている。
ウ　スイチョクな線を引く。
エ　クラスメイトからスイセンされる。

解答番号は［３１］。

（ｂ）ムサイ色

ア　サイゲンなく繰り返される。
イ　ソクサイに暮らす。
ウ　サイビな点まで観察する。

解答番号は［３２］。

エ　スイサイ絵の具。

（c）カンジャ　解答番号は［33］。

ア　カンゴ師を目指す。
イ　カンブが痛む。
ウ　カンサンとした遊園地。
エ　彼の考えにカンカされる。

（d）コウシュウ電話　解答番号は［34］。

ア　敵の陣地をキョウシュウする。
イ　アイシュウを帯びた調べ。
ウ　ホウシュウを支払う。
エ　タイシュウの支持を得る。

（e）キンチョウ　解答番号は［35］。

ア　キンベンな学生。
イ　キンサで勝利する。
ウ　キッキンの課題。
エ　ハイキンを鍛える。